（添付資料1）

最優秀賞
文部科学大臣奨励賞

「べご飼い」にかける
山形県長井市立長井南中学校
三年　矢久保　　翔

「翔、火事だがら、べご見でろ！」おんちゃんは、そう言い残して火事の現場に向かった。僕は、慌てて家の前の牛舎に飛び出した。

それは、昨年の十月九日、全校ボランティア「ラブリー長井」の日だった。早朝から地域のボランティアを行い、活動後登校することになっていた。火事はその時に起きた。

僕の家では米沢牛になる黒毛和牛二十五頭を、三か所の牛舎に分けて飼っている。生後十か月の子牛を宮城市場から買ってきて、それから二年間、僕の伯父のおんちゃんが大切に育てている。おんちゃんが留守の間、牛の世話は僕の仕事だから、慣れたものだ。でも、その日の「べご、見でろ！」は、いつもとは全然ちがった。まもなく、消防車のサイレン、救急車、パトカーの音。首を動かし、キョロキョロと心配そうなべご達。牛は、人間以上に騒音や周囲の変化に敏感だ。一頭、一頭つながれていても、驚いて跳ね上がったりして、暴れて角を折ることがある。六百キロの牛が外に逃げ出したら、家や畑をつぶし、最悪の場合は人が被害を受けることも考えられる。慣れている者が、そばにいて何とかして落ち着かせることが必要だ。僕はドキドキしながら「どど～、どど～」と声をかけ、猫をなでるみたいに、べごののどをさすってやった。べごは、みな立ち上がり、不安げに動いている。「どど～、どど～」僕は夢中でなで続けた。

それからどれくらい時間がたっただろう。何頭かが座り出した。すると、べご達は長い舌で僕の手をぺろぺろとなめ始めた。やっといつものべごに戻っていた。

「あど大丈夫だ。ご苦労様。本当に助かったなぁ。」火事現場から戻ったおんちゃんが、お礼を言った。その瞬間、僕はどっと力が抜けて、我に返った。「あっ！。学校！どう、すっぺ！」登校時間は、とっくに過ぎている。学校では僕がいないので大騒ぎになり、担任の先生が心配して家まで来て下さった。

それにしても、「学校さ行がねで、べご見でろ。」なんて、むちゃくちゃなことを言うおんちゃんだ。でも、僕は、おんちゃんが大好きだ。僕を信じて仕

事を任せてくれる。一人前の大人になった気分だ。「俺が、小中学生の頃は、田植え、稲刈りの時季になっと、学校休んで手伝ってだったんだぞ。」と、教えてくれたことがある。僕が初めてべごの世話をしたのは小学校一年の時。高学年になって、やっと肥出しをやらせてもらえるようになった。牛舎で寝そべっているべごの足もとには、ラグビーボールぐらいの大きさの糞がたくさんこびりついている。それをスコップですくって、肥塚に運ぶ。べごは一頭につき、バケツ十杯くらいの糞をするから、すくっては運び、すくっては運びを繰り返す。朝晩、二回、おんちゃんは、この作業を毎日、四十年間続けてきた。最後に米ぬかを腹の下あたりにまく。そしてほうきで背中や腹をなでてやる。べごは目をつぶって、温泉につかったみたいな顔をして、僕の手をぺろぺろとなめる。なつっこくて、本当にめんごい。

　べごは餌をたくさん与えるだけでは大きくならないし、霜の降り方が悪くなる。おんちゃんはそのべごに合った餌の量を加減している。一頭一頭のべごのことはすべてわかるのだ。「おんちゃんの生き甲斐って、何や？」と聞いてみた。「やっぱり、べごのコンクールでチャンピオンになっことだ。」と答えるおんちゃんは、最高にかっこいい。仕事に生きる男の顔をしている。俺にしかできないというプロの誇りが感じられる。

　僕は、将来おんちゃんとじっちゃと、兄と四人で、べご飼いと田んぼをするのが夢だ。農業大学校を卒業した兄は、「俺が跡継ぐ。畜産は大変だから、翔は他さ行って就職しろ。」と言う。でも、僕はやっぱりおんちゃんのように、「べご飼い」がしたい。一生をかけて打ち込める仕事は、これだと思う。

　今日も牛舎で仕事をしているおんちゃん。僕はおんちゃんの背中からたくさんのことを学びたい。

「さあ、やるぞ！」

※「行がねで」―山形の方言で、「行かないで」
※「どうすっぺ」―山形の方言で、「どうしよう」
※「なつっこい」―山形の方言で、「人懐こい」
※「めんごい」―山形の方言で、「かわいい」
※「べご」―山形の方言で、「牛」
※「べご飼い」―山形の方言で、「畜産業」
※「じっちゃ」―山形の方言で、「祖父」
※「他さ行って」―山形の方言で、「他の所に行って」